

第38回

福井県発掘調査報告会資料

— 令和4年度に発掘調査された遺跡 —

2023

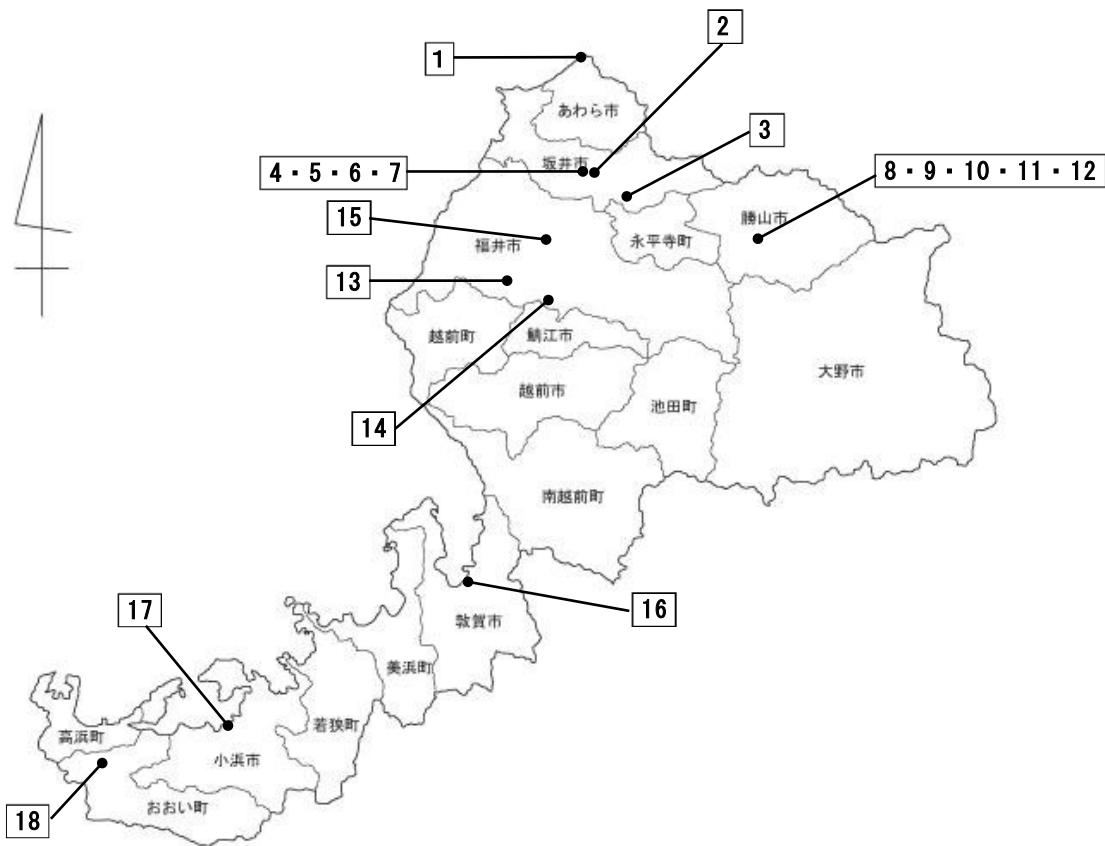
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

(表紙写真 長崎遺跡遠景)

目 次

★は報告会での発表遺跡

よしぎきごぼうあと 1 吉崎御坊跡 2	かつやまじょうあと 10 勝山城跡 22
★2 まるおかじょうあと 丸岡城跡 4	ふくろだいせき 11 袋田遺跡 24
ろくろ せやまこふんぐん 3 六呂瀬山古墳群 6	ふくろだいせき 12 袋田遺跡 26
おきぬのめきたいせき 4 沖布目北遺跡 8	おおもりかねしまいせき 13 大森鐘島遺跡 28
★5 ふなよせいせき 舟寄遺跡 10	なごじょうあと 14 南居城跡 30
★6 ながさきいせき 長崎遺跡 14	★15 ふくいじょうあと 福井城跡 32
★7 いっぽんでんしょうずあげいせき 一本田清水ケ上遺跡 16	なかいせき 16 中遺跡 34
えのきしんでんいせき 8 榎新田遺跡 18	のちせやまじょうあと 17 後瀬山城跡 36
えのきしんでんいせき 9 榎新田遺跡 20	いしやまじょうあと 18 石山城跡 38



令和4年度県内発掘調査地点（番号は目次の遺跡番号と一致）

よしざきごぼうあと 1 吉崎御坊跡

所在地：あわらし市吉崎

調査原因：吉崎配水場移転更新工事

調査期間：令和4年11月

調査主体：あわらし市教育委員会

調査面積：10 m²

時代：中世か



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 調査地は、国指定史跡範囲外側の東方に位置し、中世頃の^{ちかしきこう}地下式坑（横穴）^{よこあな}2基で構成される吉崎^{ひがしおやま}東御山遺跡にも隣接しています。掘削工事中、地表約2.4mより下位の北西断面に穴が開いたことから、遺構は発見されています。

主な遺構 検出した遺構は地下式坑（横穴）1基以上です。地下式坑は、地表から下、縦に穴を掘り、次にその縦穴内から横に穴を掘って地下室へ至る構造の遺構です。関東地方では、物品の貯蔵施設もしくは埋葬施設の墓として中世～近世に多く造られています。開口した穴は地下室となる横穴の奥側にあたり、反対側の壁中央の土砂が入り込んだ箇所が本来の出入口の縦穴部と思われます。縦穴を除く横穴部は、長さ約3.2m、幅約2.4mのほぼ長方形です。遺構は埋め戻して保存するため、縦穴部は未調査です。また、岩盤ではなく砂層に構築されているため、天井崩落の恐れがあり、掘削は床面まで行っていませんが、天井の最も高いところまで現状約1.9mです。

縦穴両脇の壁面が小さく掘り窪められており、その天井が^{すす}煤けて黒ずんでいることから、そこに照明用の^{とうみょうざら}灯明皿を置いていたことが想定されます。

横穴は開口部北東下方の調査区外へと延伸していますが、地表下4m以上と深く危険なこともあり、ここの調査は断念しました。よって、^{ぜんしつ}前室と^{こうしつ}後室の^{ふくしつ}複室構造をした1基か、別にもう1基で計2基とするべきか、明らかにできませんでした。

主な遺物 床面まで掘削していないこともあり、地下式坑の構築時期を示す遺物は何も出土していません。しかし、隣接する吉崎東御山遺跡の地下式坑と同様、中世頃の墓の可能性が最も高いと考えられます。 (橋本幸久)

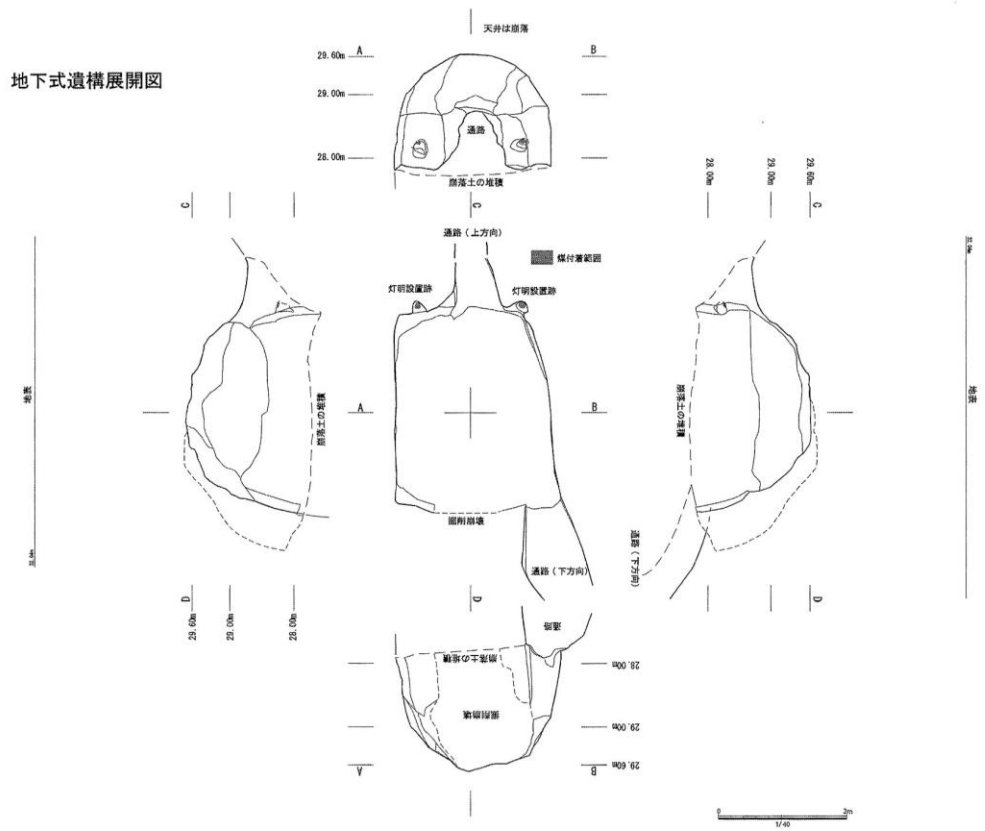


図1 吉崎御坊跡地下式坑(横穴)展開図



写真1 吉崎地下式坑発見後の状況



写真2 地下式坑内開口部より縦穴入口方向

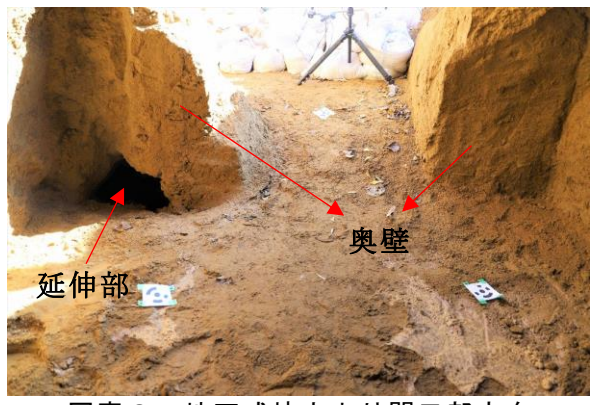


写真3 地下式坑内より開口部方向



写真4 奥壁北東延伸部内の状況

まるおかしょうあと 2 丸岡城跡

所在地：坂井市丸岡町霞 1 丁目 59 番地

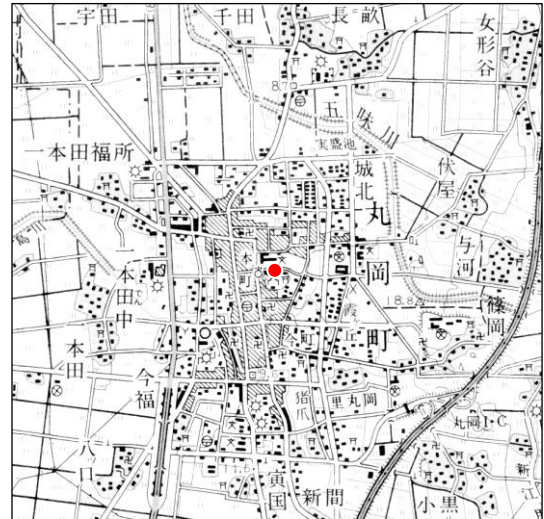
調査原因：丸岡城周辺整備事業

調査期間：令和 4 年 11 月～12 月

調査主体：坂井市産業政策部観光交流課

調査面積：230 m²

時代：近世～近代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 丸岡城は坂井平野の独立丘を中心に縄張りされた平山城です。北陸で唯一現存する天守は、重要文化財に指定されています。現在内堀をはじめ主要な曲輪は市街化が進んでおり、外堀の一部は今も水路として利用されています。

調査は平章小学校のグラウンドの南側、二の丸御殿があった曲輪と隠居曲輪の間にあたる場所です。

主な遺構 調査では、調査地の南から北にかけて、10～30cm 程度の石を敷き詰めた範囲を検出しました。石を敷き詰めた範囲は、南から北に向かって伸びています。江戸時代の絵図では、この場所は二の丸と隠居曲輪の境界にあたる石垣と土塁が描かれています。検出した遺構はこれら構造物を造るための基礎工事（地業）と考えられます。

調査では南北に延びる溝を検出していますが、地業の一部を壊して掘られていることから、廃城後に掘られたものと推定されます。

まとめ 平成 26 年には、今回調査した場所から西の場所で調査をしています。その結果、石垣と土塁の跡などを検出しています。過去の調査成果と今回調査で検出した地業の跡から推定される石垣と土塁の位置は、絵図に書き込まれていた寸法とほぼ一致します。絵図の内容が信用できるもので、遺構も絵図のとおりに残っている可能性が高いと考えられ、今後の調査が期待されます。（堤 徹也）



図1 「正保城絵図」のうち、「越前国丸岡城の絵図」
【国立公文書館蔵】



写真1 調査地南側



写真2 調査地北側



図2 調査地平面図

ろくろせやまこふんぐん 3 六呂瀬山古墳群

所在地：坂井市丸岡町上久米田

調査原因：史跡整備に向けた範囲確認

調査期間：令和4年10月～11月

調査主体：坂井市教育委員会

調査面積：92 m²

時代：古墳時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 六呂瀬山古墳群は、今から約1600年前に造られた全長143mの規模をもつ1号墳（前方後円墳）を含む4基で構成された古墳群です。古墳時代の越前地域を知るうえで、重要な遺跡と評価され、平成2年に国指定史跡となりました。

主な遺構 調査対象である六呂瀬山1号墳は、標高約200mの山頂に立地しており、自然の尾根を利用して築造されています。今回の調査では、前方部裾部を確認し、平成30年度の調査で明らかになった後円部裾部と併せて、全長143mの規模を持つ前方後円墳であることがわかりました。また、後円部東側に位置する張り出し部では、いえがたはにわ家形埴輪の一部であるかつおぎ鯉木やまるぞこつぼ小型丸底壺、食べ物を模した土製品等、とせいひん祭祀に関する遺物が出土しています。

さらに、ばいちょう陪塚と思われる2号墳の調査では、ふきいし葺石や埴輪といった外表施設は確認できず、主体部部分も一部にほこう墓壇底の残存部を確認できるものの、広い範囲でかくらん攪乱されていることがわかりました。

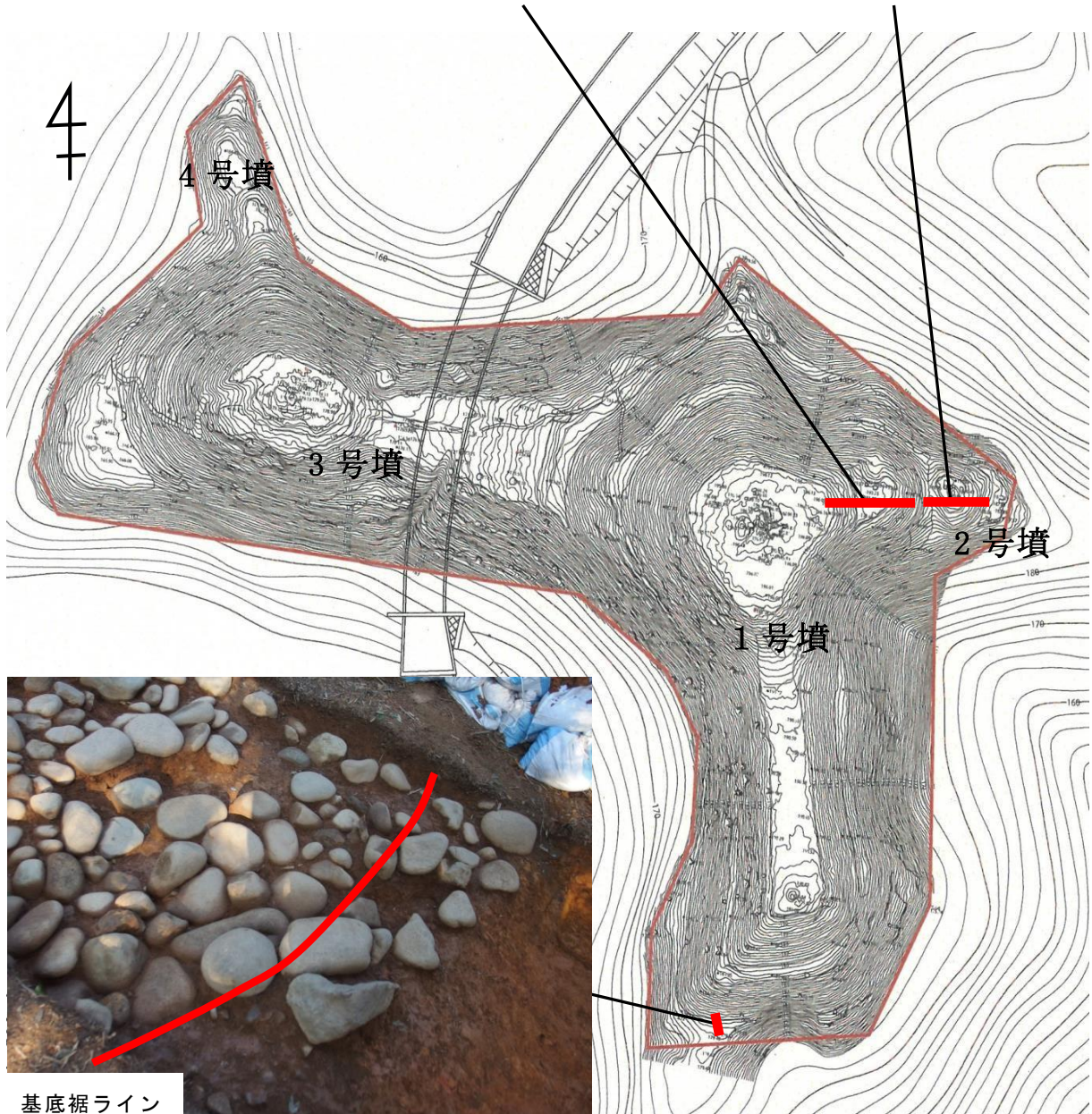
主な遺物 本調査で出土した主な遺物は円筒埴輪、家形埴輪の一部である鯉木、小型丸底壺、食べ物を模した土製品等です。これらの遺物は張り出し部から主に出土しました。
(小林美土里)



1号墳張り出し部埴輪等出土状況（南から）



墓壙底残存部
2号墳墳頂主体部完掘状況（南から）



基底裾ライン

1号墳前方部南西側裾ライン検出状況（南西から）

おきぬのめきたいせき 4 沖布目北遺跡（5区）

所在地：坂井市丸岡町舟寄

調査原因：主要地方道丸岡川西線福井港

丸岡インター連絡道路改良工事

調査期間：令和4年4月～7月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：1,100 m²

時代：縄文時代



位置図（S=1/50,000）

遺跡について 遺跡は、坂井平野を北西に流れる兵庫川の左岸に位置します。坂井平野は、九頭竜川・竹田川・兵庫川などの河川によって形成された沖積平野です。

今年度の調査区は、昨年度調査区（1～4区）の東側にあたり、北側と南側の二箇所に分かれます。

北側調査区では、遺構は調査区西側に偏ります。南側調査区では、遺構は調査区南側に偏ります。

主な遺構 小穴・溝・埋甕・集石といった遺構が見つかりました。

小穴は様々な大きさがあります。その多くは性格が不明です。一部は、縄文時代後期の建物の柱穴とされますが、調査区内で明確な建物の並びを確認することはできませんでした。埋甕は4基見つかりました。底に穴が開けられているものもあります。集石は、大小の河原石を一箇所に集めたものです。縄文土器の破片もそのなかに混じていました。

主な遺物 縄文土器・土製品・石器などが出土しました。土器は、縄文時代後期前半のものです。土製品としては、耳飾りがあります。石器は、打製石斧・磨製石斧・磨石などがあります。

まとめ 沖布目北遺跡5区は、西側に隣接する昨年度調査区に比べ、遺構・遺物量ともに少ないことから、縄文時代後期の集落の東側縁辺部にあたる箇所であると判断されます。

（白川 綾）



北側調査区・全景（南から）



北側調査区・北壁土層堆積状況（南西か



集石遺構検出状況（南から）



埋甕検出状況（南から）



埋甕検出状況（東から）



埋甕検出状況（東から）



ピット半裁状況（南から）



南側調査区・全景（北から）

ふなよせ いせき 5 舟寄遺跡

所在地：坂井市丸岡町舟寄

調査原因：主要地方道丸岡川西線福井港

丸岡インター連絡道路改良工事

調査期間：令和4年4月～9月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：2,610 m²

時代：縄文時代中期



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 舟寄遺跡は、長崎集落と沖布目集落の水田に展開する遺跡で、縄文時代から江戸時代にいたる遺物散布地として知られています。周辺は1960年代まで条理地割^{じょうりちわり}が残っており、早くから土地開発が実施された記録も残るため、現在につづく水田利用の開始や旧地形の改変は古代にまでさかのぼる可能性があります。そのため本来の自然な地形をうかがうことが難しくなっています。

今回の調査区の南東へ数10mの地点で、平成17年度に発掘調査が実施され、今から約4500年前の縄文時代中期後半を中心とする集落跡が確認されました。今回の調査では、調査区の南側で20棟の^{たてあな}竪穴住居を確認しており、以前の調査地から連なる同じ集落になるようです。竪穴住居の多くが重なり合った状態で検出されており、何度も建て替えながら住み続けたことがうかがえます。調査区の中央から北側にかけては、河川跡や谷状に落ち込む地形が確認されており、そこでは遺構・遺物が希薄になるため、今回確認した住居群が集落の北端に当たるようです。

主な遺構 検出した遺構は、^{とこう}竪穴住居20棟、^{しょうこう}土坑・小坑約70基、^{うめがめ}埋甕5基等があり、このほか複数の河川（^{しぜんりゅうろ}自然流路）跡を確認しました。

竪穴住居は、多くが長径5m未満と小規模ですが、8・14号建物は6mを超えます。石組炉^{いしくみろ}が残存した竪穴住居は5・22号建物だけですが、焼けて硬くなった地面や炭・^{すす}煤けて割れた石等が残る炉の跡^{あと}は、4・6・7・8・9・14・20・21号建物で確認されました。このうち8・14号建物の炉跡は3面以上の硬化面^{こうか}が重なってお

り、補修しながら継続的に使用したことがうかがえます。土坑は大小様々なものがありますが、そのうち 17 号土坑は底面が焼けて硬化していました。その硬化面の厚さが 8・14 号建物炉跡の硬化面一面分の厚さの 2 倍程度となっていたことから、同じ火を焚いた跡だとしても建物の炉跡とは性格の異なることが考えられます。

埋甕^{うめがめ}は、おもに土器の下半や底部を切除して、口を上にした正位で埋設したものです。1・3号埋甕は下部を切除して、2号埋甕は底部に円い穴をあけて埋設していました。4号埋甕は、複数の土器を入れ子状にした、特殊な埋設のしかたでした。まず、底部付近を切除した土器を正位で埋設し、2個体目の土器をその内側に入れ子状に重ねて入れていました。2個体目の土器は後世の土圧の影響で割れていましたが、底部が切除されずに残存していました。最後に、別個体の底部付近の破片を、こんどは逆さにして被せていたようです。まだ確認できていませんが、その破片は1個体目の土器から切除した底部なのかもしれません。5号埋甕のみ建物内部（9号建物）に埋設されており、土器が逆位で埋設されていました。

主な遺物 出土した土器は、おもに縄文時代中期後半を中心とする時期のものであり、後期・晩期にいたるものも確認され、おおむね集落の存続期間を示すと思われま



調査区全体のおもな遺構配置(上が北)

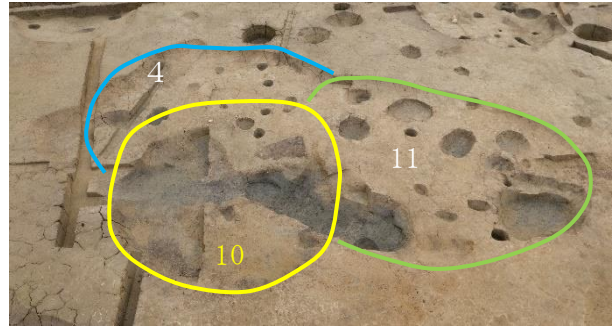
す。多くの生活に使用された土器のほかに、何かしら^{さいし}祭祀的なことに使われたことが考えられる土器が 2 号建物から出土しました。その土器は、下に^{きやくだい}脚台が付く短い首の壺形土器で、全面が赤色顔料で真っ赤に塗られています。台の付根には四方向に穴があけられています。土器の上半には弓形とけん玉形の突起が交互に首の部分からぶら下がる表現になっていますが、けん玉形の位置の一つは大半が欠けてしまっているものの、大きく把手のように出っ張っていたようであり、いわゆるジョッキ形の壺となるようです。このほか、^{せきそく}石鏃や^{せきすい}石錘、^{いしざし}打製石斧・磨製石斧、石匙などの多様な石器や、石器製作にかかわるとみられる石材・^{はくへん}剥片等が多数確認されました。（御嶽貞義）



赤彩された台付壺



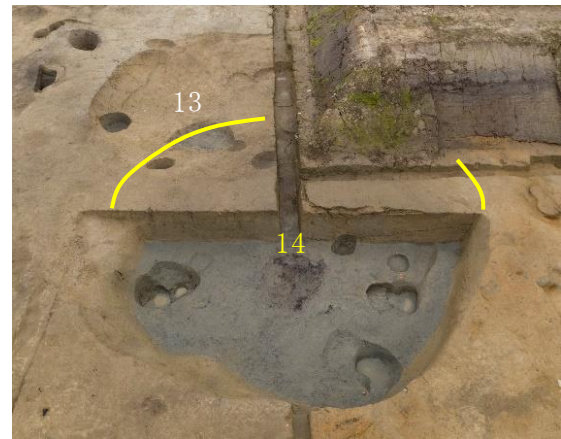
5号建物(南東から)



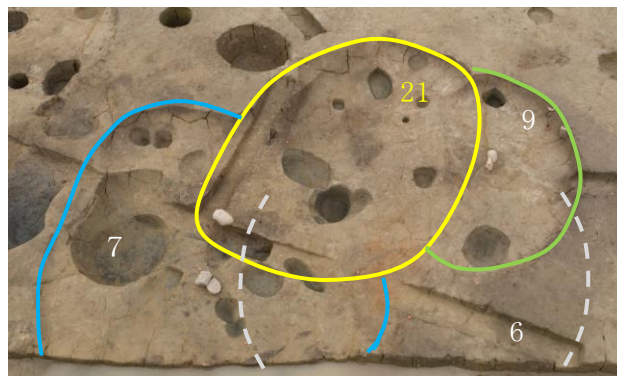
4・10・11号建物(北から)



8号建物(南東から)



13・14号建物(北から)



6・7・9・21号建物(南から)



8号建物炉跡



14号建物炉跡

炉跡断面の被熱硬化層



17号土坑(北西から)



2号埋甕(東から)



4号埋甕(南東から)

ながさきいせき 6 長崎遺跡（6区）

所在地：坂井市丸岡町長崎

調査原因：主要地方道丸岡川西線福井港

丸岡インター連絡道路改良工事

調査期間：令和4年4月～9月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：3,280 m²

時代：中世



位置図（S=1/50,000）

遺跡について 長崎遺跡は、丸岡の町の西側、兵庫川の東岸にあります。鎌倉時代後半から室町時代にかけて、称念寺^{しょうねんじ}を中心に、多くの人びとが住む町が広がっていました。また、戦国時代には、朝倉氏の有力拠点の一つにもなっていました。

主な遺構 長崎の町の様子を知るうえで、多くの手がかりが見つかりました。

14世紀になって、北側に東西方向の大きな溝（北側大溝）が作られました。これは、町の中と外とを区切るための溝だと考えられます。また、北側大溝のすぐ北に、当時の河川から称念寺付近に舟で入るための溝（舟入状遺構^{ふないりじょう}）が作られました。南側でも大きな溝（南側大溝）が作られ、中間にも小さな溝が3つ作られました。

しばらくたってから、大溝のまわり以外、全体が平らに整地されます。その時期については、14世紀中かそれとも15世紀なのか、現段階でははっきりしていません。

16世紀以降は、ふたたび整地され、北側に小ぶりの溝がいくつか掘られました。また、北西隅近くに、井戸が掘られました。一方、南北の大溝はかなり埋まり、建物などの遺構もほとんどありません。町の中心は、西側に移っていったと考えられます。

主な遺物 長崎の町が大いに栄えたことを示す、さまざまな遺物が見つかりました。

〔陶磁器・土器〕 中国から運ばれてきた青磁^{せいじ}や白磁^{はくじ}の破片が多数出土しました。古瀬戸^{せと}や珠洲焼^{すずやき}といった日本列島内の製品、越前焼^{かめ}の甕やすりばちも多数出土しています。中世の長崎の町は、日本海を通じて東アジア全体にまでネットワークを広げる、地域の経済や交流の中心だったのです。そして、お茶をわかす道具（瓦質風炉^{がしつふうろ}）や、貴重な褐釉茶入^{かつゆうちやいれ}の破片も出土しました。中世の茶文化を示す、重要な資料です。

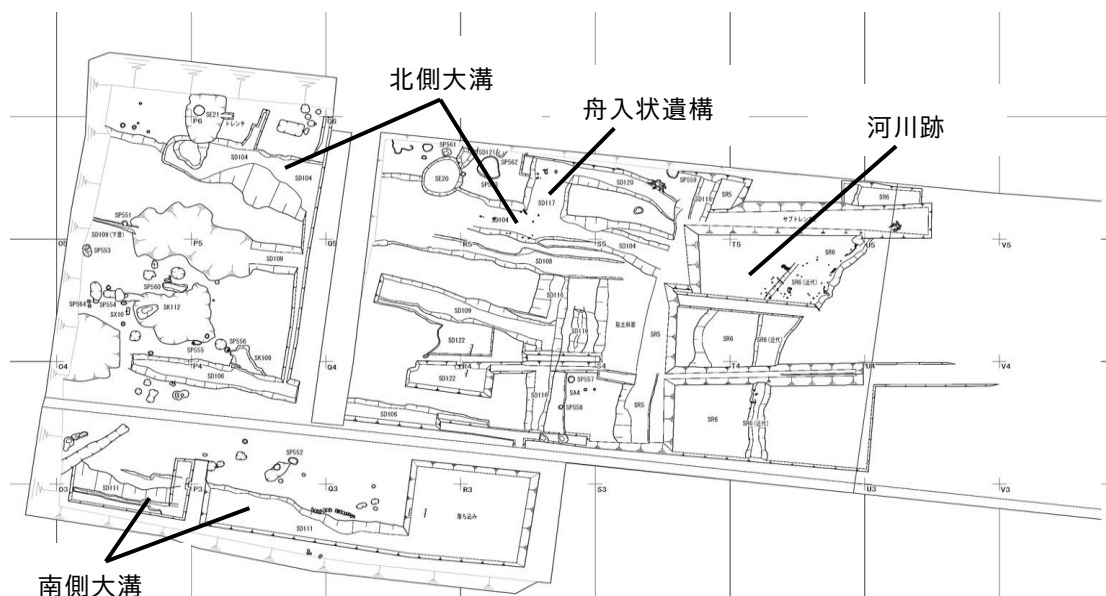
〔漆器・木器〕 漆塗りの椀や皿などが出土しました。とても細かい紋様のあるものもあります。また、^{かい}櫛・^{まげもの}曲物底板・^{はきもの}はきもの・^{さや}刀の鞘といった木器、さらには文字が書かれた^{にふた}荷札と考えられる木器も出土しました。当時のくらしがよくわかります。

〔石製品〕 バンドコ（^{あんか}行火）などが出土しました。つくりかけのものもあります。

〔青銅・鉄製品〕 仏具の^{わん}鉢や釘、束になった^{どうせん}銅銭、^{つち}鋸や^{こつか}小柄が出土しました。

まとめ 中世の越前の社会や文化を考える上で、多くのあらたな発見がありました。室町時代前半の出土品が多く見つかった点も重要です。かつて坂井平野で大いに栄えた長崎の町の歴史をさらに調べていくことで、いろいろなことがわかりそうです。

（魚津知克）



遺構全体図（第2面：14世紀ごろ）



称念寺と調査区（南方上空から）



舟入状遺構（南西から）

7 一本田清水ケ上遺跡

所在地：坂井市丸岡町八ッ口

調査原因：主要地方道丸岡川西線福井港

丸岡インター連絡道路改良工事

調査期間：令和4年4月～12月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：8,550 m²

時代：平安～中世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 一本田清水ケ上遺跡は、坂井平野の東部、今の八ッ口の集落とその北西に広がる遺跡です。九頭竜川扇状地の端にあり、周辺では、複雑に流れる川を避けた小高い土地を利用して、いくつもの集落が営まれてきたことが知られています。

八ッ口もそうした集落の1つで、今回調査した部分は、八ッ口の集落からその西側の田んぼにわたる範囲です。調査では、鎌倉～室町時代の集落の跡を確認しました。

主な遺構 溝や井戸、建物の痕跡である柱穴などが複数見つかりました。溝はまっすぐもしくは直角に曲がりながら長く続いていました。建物の柱を建てるために掘った穴も見つかりました。建物の形に沿って四角く並んでいるとみられる穴もあり、どうやら、溝で土地を区画し、その中に建物や井戸をつくって暮らしていたようです。

これらは、いずれも鎌倉～室町時代のものです。なお、調査範囲の中でも、西側では鎌倉時代のものが、東側では室町時代以降のものが目立つ傾向にありました。

主な遺物 土師皿という素焼きのお皿が一番目立ちました。越前焼の甕や鉢など、加賀焼の甕、青磁のお碗、瓦質土器という黒く燻した焼き物で作った火鉢、銅銭、墨書をした板なども見つかりました。

このうち、火鉢は、上から見ると花の形をしています。このような火鉢の生産は、鎌倉時代の終わり頃に奈良で始まり、その後全国に広がったことが知られています。今回見つかった火鉢も、奈良で作られたものか、その影響を受けたものでしょう。

ここまで見てきた遺物は、鎌倉～室町時代のものです。このほかにも、古墳時代の甕や高坏、古代の坏なども見つかりました。 (吉田悠歩)



図2 高坏 (南東から)



図4 溝 (南から)



図6 井戸 (北から)

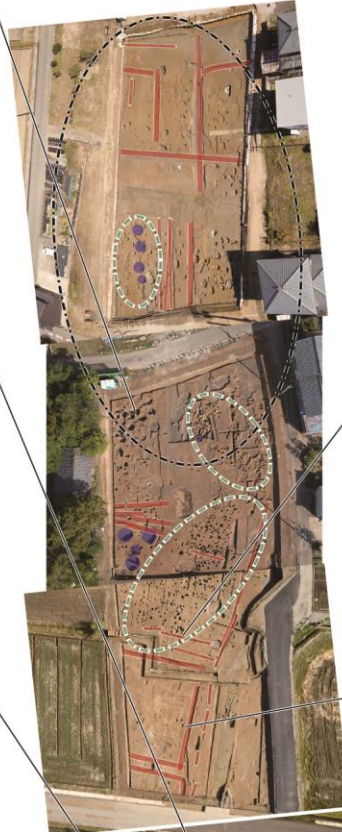


図8 井戸 (南から)



柱穴

図10 柱穴の集中 (東から)



- 溝
- 柱穴などの集中部
- 建物
- 井戸
- 新しい時期ものが目立つ範囲

図1 調査区全景



図3 火鉢



図5 溝 (南から)



図7 溝 (西から)



柱穴

図9 柱穴の集中 (東から)



図11 溝(西から)

えのきしんでんいせき 8 榎新田遺跡

所在地：勝山市元町3丁目 605-4

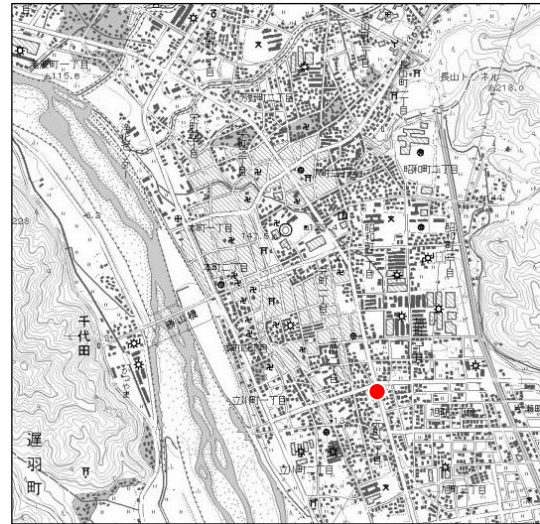
調査原因：店舗の新築

調査期間：令和4年7月

調査主体：勝山市

調査面積：46.8 m²

時代：奈良・平安時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 当遺跡は、勝山市役所から約 1.4 km 南方の九頭竜川右岸の河岸段丘上に立地し、立川町2丁目、元町3丁目、旭町2丁目一帯に広がっていると推定されます。調査地は当遺跡範囲の縁辺部にあたり、近隣には個人住宅が建ち並んでいます。榎新田遺跡の発掘調査は今回で3回目となります。調査の結果、奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀前半）を中心とした遺物包含層が良好に残り、遺構や遺物も見つかりました。なお、この時期の上にさらに中世の土器を含む遺物包含層が薄く残存していました。

主な遺構 小穴が24基、土坑2基が見つかりましたが、建物跡などを物語る遺構は見当たりませんでした。これらの遺構の覆土は、黒色土と黒灰褐色土の大きく2つに分類が可能です。前者の黒色土からは、主に平安時代の土器が出土しました。調査地の北東付近は地山が礫層で、遺構を確認することができませんでした。

主な遺物 出土量はコンテナ箱数でいうと1箱程度です。平安時代の土師器、須恵器を中心に、調査地南側に残存していた中世の遺物包含層からは越前焼が見つかりました。また、注目する資料としては、小穴から出土した赤彩された土師器（蓋）です。当遺跡からは、先の調査でも赤彩された土師器の坏が見つっています。これらの土器は金属器を模倣したものともいわれており、市域からは榎新田遺跡のみの発見であることから、当遺跡の大きな特徴を示す資料といえます。（藤本康司）

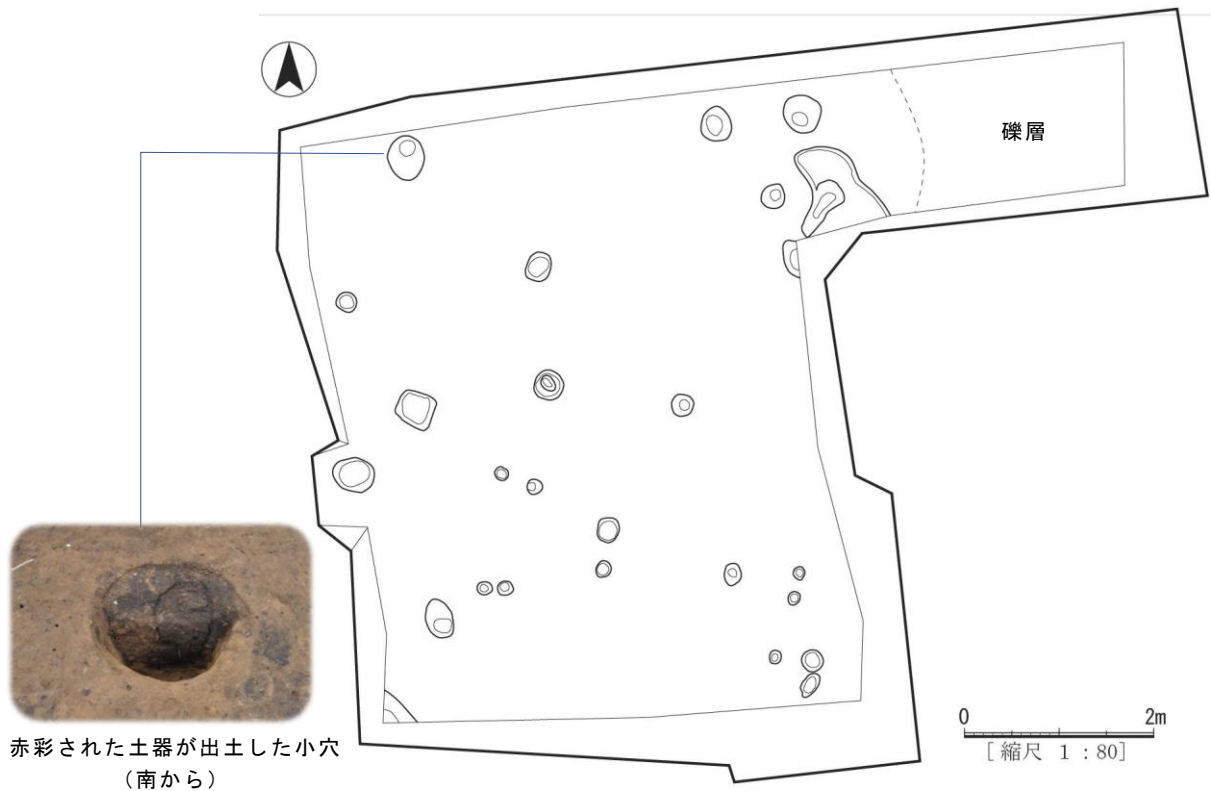


図 1 調査地平面図



写真 1 調査地 遠景(南から)



写真 2 調査地 全景(南西から)



写真 3 土層堆積状況(北から)

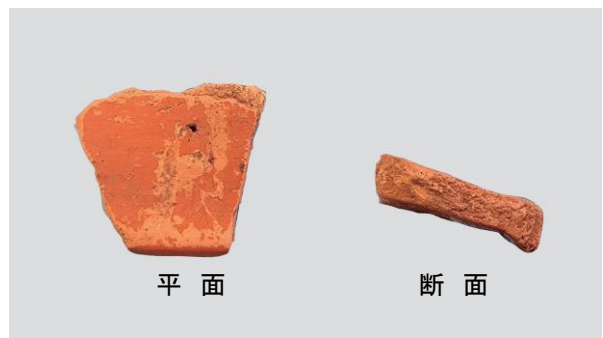


写真 4 赤彩された土師器(蓋)

えのきしんでんいせき 9 榎新田遺跡

所在地：勝山市元町3丁目507-4

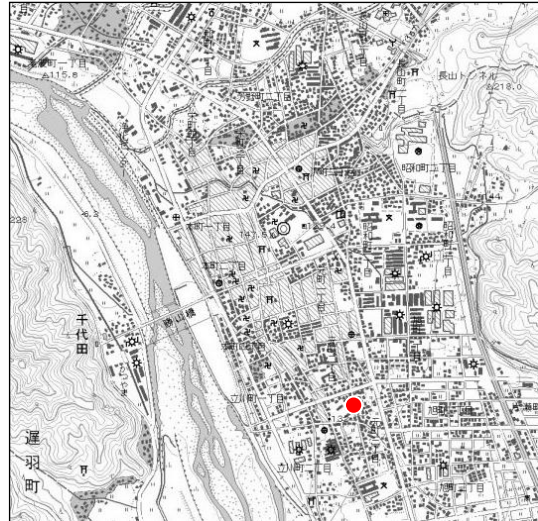
調査原因：家屋の新築

調査期間：令和4年12月～同5年1月

調査主体：勝山市

調査面積：408.6 m²

時代：江戸時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 令和4年度の榎新田遺跡の発掘は2回目で、これまでの調査を含めると4回目となります。調査地は当遺跡範囲の縁辺部にあたります。近隣には個人住宅が建ち並び、もともとは工場が建設されていた場所でした。調査の結果、榎新田遺跡の特徴である奈良・平安時代は少なく、今まで未確認であった江戸時代のくらしの様子が見つかりました。

主な遺構 ^{どこう}土坑や小穴が多数を占めるなか、建物跡を復元できる小穴があり、1棟の掘建柱建物が見つかりました。建物跡は、3間×2間で主軸は南北方向に走ります。規模は桁行4.0m、梁行2.7mを測り、柱穴の大きさは径0.2m前後です。建物の規模やこの付近の遺物包含層^{ほうがんそう}から江戸時代の土器が出土したことから、江戸時代のものと考えられます。また、調査地の中央付近には南北方向に川石を多量に含む礫層^{れき}が見つかり、北西角付近にこれと一連になるものか、落ち込む肩部を見つけました。おそらく、河川が流れていた痕跡と考えますが時期の特定には至りませんでした。

主な遺物 出土量はコンテナ箱数でいうと1箱です。奈良・平安時代の土師器^{はじき}と須恵器^{すえき}が各小片1点ずつ見つかった以外は、江戸時代の肥前陶器^{ひぜん}3点、かわらけ1点、越前焼2点でした。遺構からは出土せず、遺物包含層からこれらは見つかりました。土器の出土量が大変少ない状況であったことは、おそらく古代から現在に至るまで断続的に土地利用があり、とくに近代になって織物工場の建設が行われるなかで全体的に削平の影響が著しかったからと推定されます。 (藤本康司)

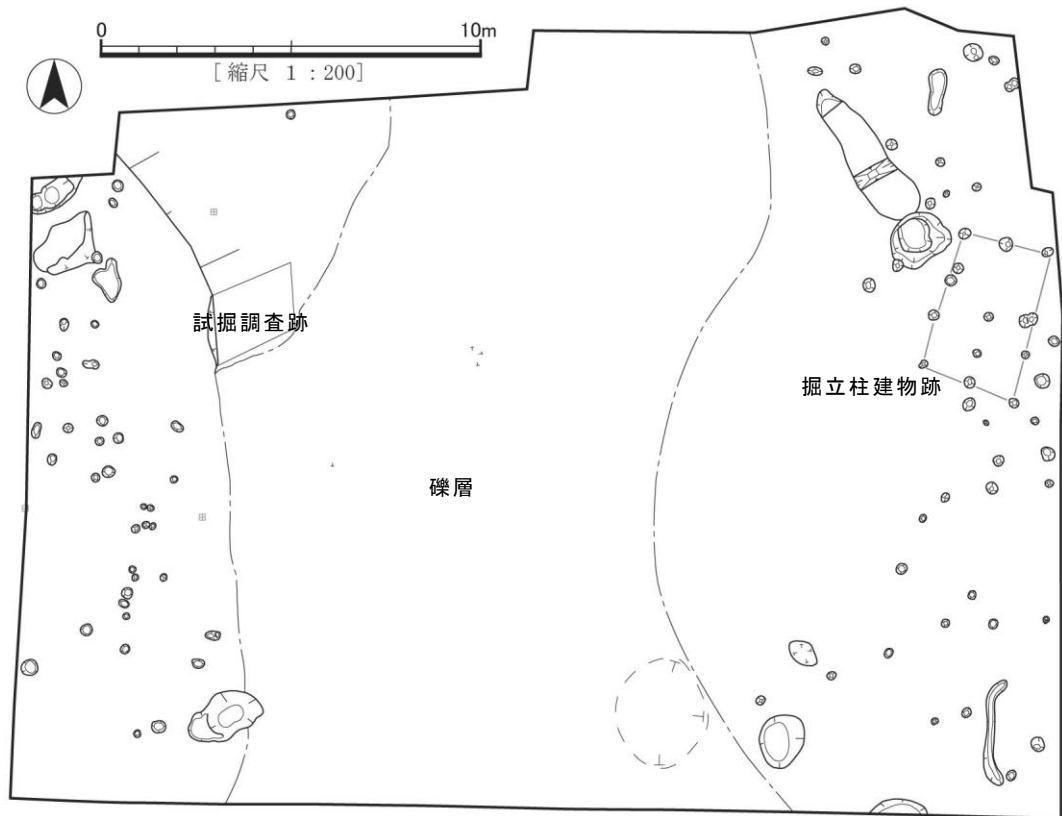


図 1 調査地平面図



写真 1 掘立柱建物跡 全景(西から)



写真 2 落ち込み肩部(南から)



写真 3 礫層の検出状況(南から)

かつやまじょうあと 10 勝山城跡

所在地：勝山市元町1丁目地係

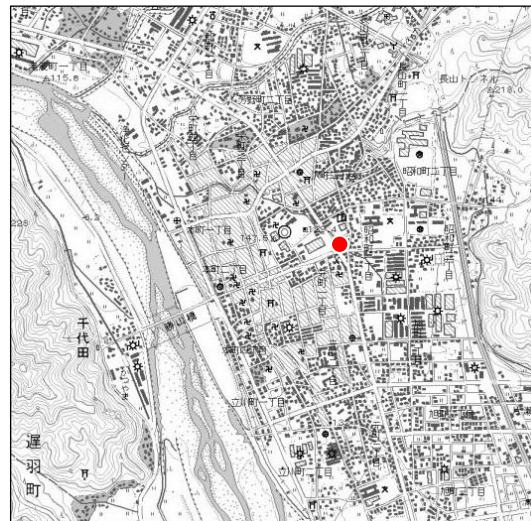
調査原因：雨水放水路工事

調査期間：令和4年7月

調査主体：勝山市

調査面積：63.6 m²

時代：弥生時代、江戸時代以降



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 勝山城は、^{むろこやまじょう}村岡山城を本拠地としていた^{しばたかつやす}柴田勝安が、天正8年(1580)に^{ふくろだ}袋田村(現 勝山市中心部)へ新しい城を築いたことがはじまりといわれています。地形をみると勝山城が築かれた地域は勝山盆地の中央に位置しており、現在でも、隣接する県や市町を結ぶ主要な道路が通っているように、当時も交通の要衝であったと考えられます。また、西側には九頭竜川が流れ、水運にも適した地でもありました。元禄4年(1691)に勝山へ入部した^{おがさわらさだのぶ}小笠原貞信によって、本格的に城下町が整備されましたが、明治時代以降の開発行為により勝山城は消滅し、現在は「勝山城再建絵図並びに添書」(1709年作成)などでしかその姿を想像することができません。勝山城跡の発掘調査は今回で4回目となります。調査地は、絵図などから「神宮寺」の寺域に含まれ、^{うまだし}馬出の堀にも隣接している付近です。

主な遺構 想定していた馬出の堀は見つからず、「神宮寺」の寺域の平坦面が確認されたことから、^{じょうかく}城郭の構造をより詳しく推定できる資料となりました。また、明治期の土坑や溝、弥生時代の土器が出土した小穴が見つかりましたが、昭和期の織物工場や道路の建設による^{かくらん}削平や攪乱で江戸時代の遺構は確認できませんでした。

主な遺物 出土量はコンテナ箱数でいうと3箱程度です。東西方向に走る^{そっこう}側溝を挟み、北・南区に便宜的に分けると北側のみに堆積する江戸時代の遺物^{ほうがんそう}包含層(灰色土)から越前焼のすり鉢や^{ひぜん}肥前陶器が見つかりました。その他は、明治期以降の整地層や^{とこう}土坑などから肥前陶器、赤瓦、銭貨(昭和11年発行の1銭)などが出土しました。市による勝山城跡の発掘調査では、初めての弥生時代の土器(^{ちようけいつぼ}長頸壺)が見つかり、

しちりかべ
七里壁より上の河岸段丘面において弥生時代のくらしの一旦が垣間見れる大きな成果となりました。
(藤本康司)

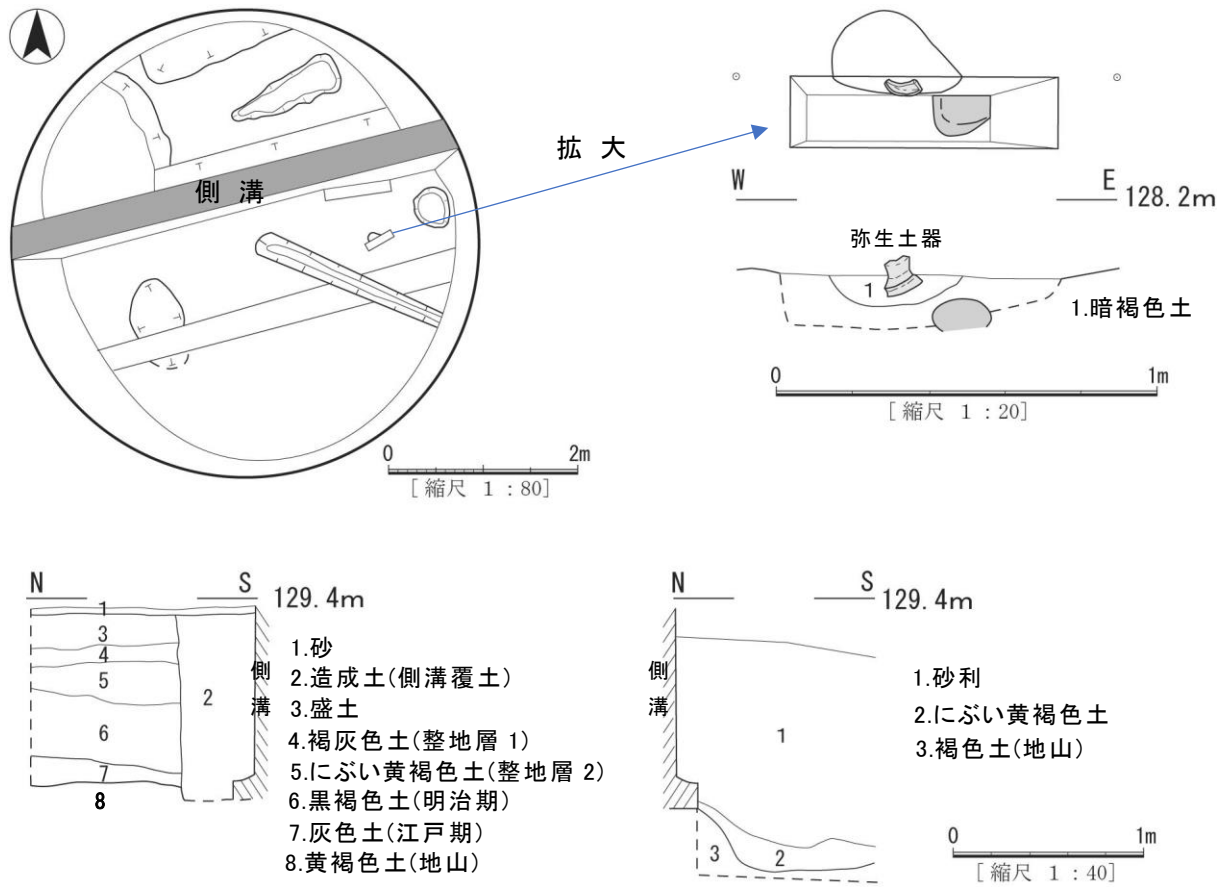


図1 調査地の平・断面図



写真1(左上) 調査地[北]全景(西から)

写真2(右上) 調査地[南]全景(西から)

写真3(左下) 発見された弥生土器

ふくろ だいせき 11 袋田遺跡

所在地：勝山市昭和町1丁目地係

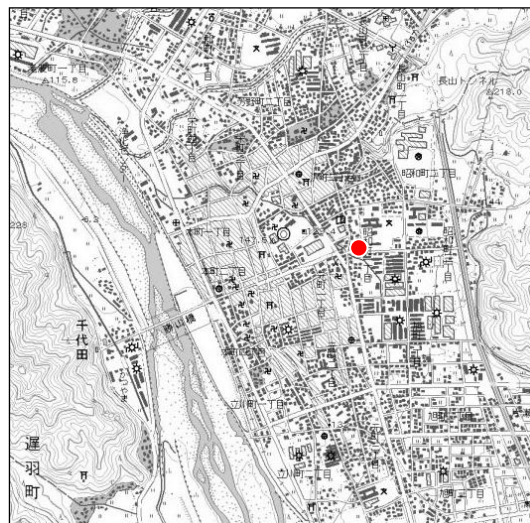
調査原因：コンクリート管推進工事

調査期間：令和4年9月～10月

調査主体：勝山市

調査面積：36.0 m²

時代：古墳時代～鎌倉時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 袋田遺跡は、平成31年(2019)、文化庁が認定する「日本遺産」の構成文化財に登録された「七里壁」沿いに分布し、九頭竜川右岸の河岸段丘上に立地します。勝山市による当遺跡の発掘調査は4回目となります。袋田遺跡としては調査事例が少ない古墳時代から鎌倉時代の生活痕跡が見つかり、右岸の河岸段丘上における当時の暮らしを知る上で貴重な発見となりました。調査地は、西側に大蓮寺川が流れ、今回の調査成果はこの河川と関係がある状況でした。そして、当遺跡は奈良・平安時代が中心ですが、鎌倉時代の白磁碗などが見つかり、古代から継続した集落が付近にあったことを物語る大きな成果となりました。

主な遺構 6m方形の調査地から径4mほどの円形に掘り込んだところ、小さな穴が4基、見つかりました。また、調査地中央付近には南北方向の落ち込みを壁面の土層断面で確認できました。この落ち込みの土層堆積は、上層に細かい砂質土、下層に粗い砂質を多く含むものでした。この状況から、水が流れ込み、水の堆積作用で堆積した土層と考えられます。なお、この土層からは古墳時代～鎌倉時代の土器などが出土しており、鎌倉時代に埋没したといえます。

主な遺物 出土量はコンテナ箱数でいうと4箱程度です。落ち込みに堆積した地層からは、古墳時代の須恵器(坏)、奈良・平安時代の須恵器や土師器、そして鎌倉時代の白磁碗などが見つかりました。地山直上で出土した石製品は打製石斧、磨石、台石ですが、詳しい時期を特定することはできませんでした。(藤本康司)

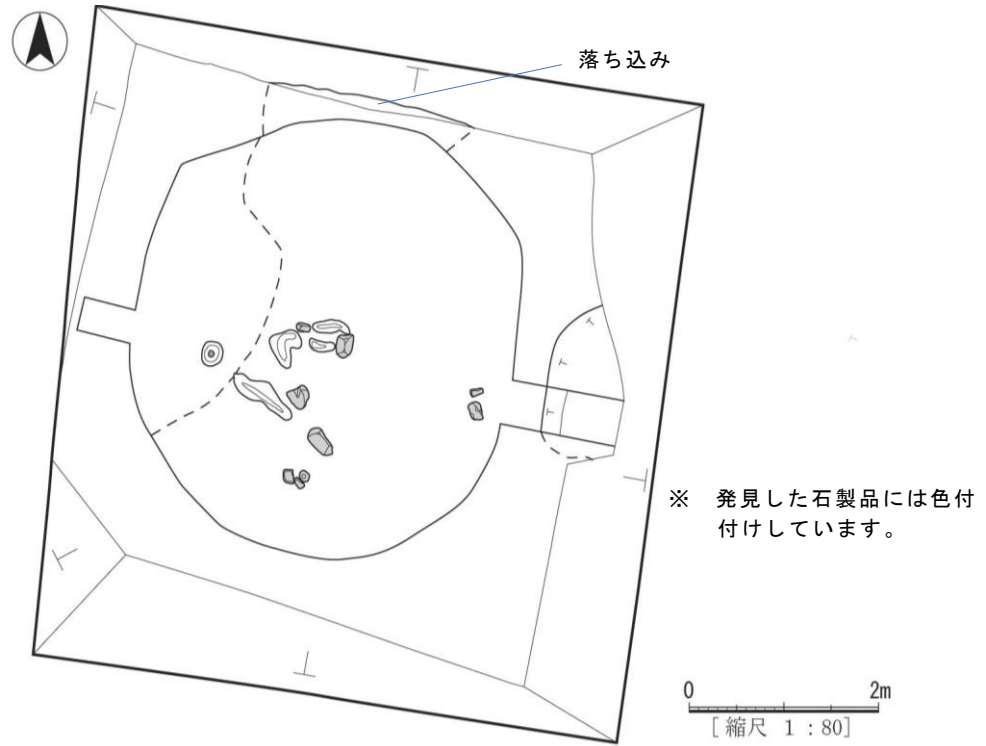


図1 調査地平面図



写真1 調査地全景(東から)



写真2 土器の出土状況(西から)



写真3 地山直上で発見した石製品(北から)

ふくろだいせき 12 袋田遺跡

所在地：勝山市本町2丁目・3丁目

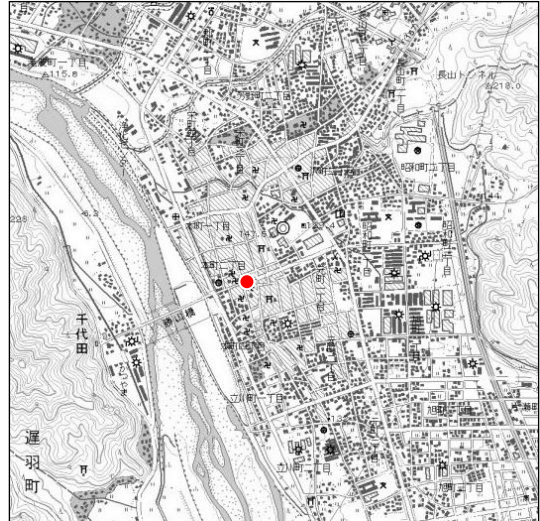
調査原因：一級河川大蓮寺川改修事業

調査期間：令和4年4月～8月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：305 m² (7区：160 m² 8区：145 m²)

時代：弥生・古墳時代・奈良・中世・近世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 袋田遺跡は九頭竜川右岸の河岸段丘上に位置し、中世の袋田村、近世の勝山城下町のほぼ全域を含むと考えられる複合遺跡です。令和元年から市道元禄線の中央部分で調査しており、最終年となる4年度は西宮寺東側の道との交差点部分から後町通りとの交差点部分までが対象です。2分割した対象地の西側を7区、東側を8区と呼称して調査し、どちらの調査区でも4面の生活面を検出しました。

主な遺構 7区では、石組井戸1基、石積遺構2基、池状遺構1基、鍛冶関連遺構、竪穴住居3棟などを検出しました。鍛冶関連遺構は、2重の粘土の壁で作った半球形の構造物で精錬に関する可能性があるものと、その傍らの鉄滓を捨てた土坑、これらの約15m東側にある鍛冶炉の底部とみられる被熱面です。昨年と合わせて室町時代の鍛冶関連遺構が3箇所確認され、『平泉寺賢聖院院領目録』にみえる鍛冶屋の存在がより明確となりました。また8世紀代のカマドを有する竪穴住居や、勝山市域で初めてみつけた7世紀前半の竪穴住居は、勝山の古代を考える上で貴重な資料と言えます。

8区では、石組井戸4基、素掘り井戸1基、池状遺構1基、鍛冶関連遺構などを検出しました。鍛冶関連遺構は炉の底部と考えられる被熱面と、その鉄滓を捨てた土坑で、時期は江戸時代と考えられます。『幕末勝山町之図』などから城下町に鍛冶屋がいたことは明らかでしたが、それが考古学の面からも裏付けられる結果となりました。

主な遺物 弥生土器、土師器、須恵器、かわらけ、越前焼、肥前系陶磁などの土器・陶磁器類や、打製石斧、石臼やバンドコといった石器・石製品のほか、鉄滓や砂岩製の羽口、鉄製品など鍛冶に関するものも出土しました。

(藤本聡子)



7区 精錬関連遺構(北東から)



7区 鉄滓を捨てた土坑(北東から)



7区 鍛冶炉の底部(北西から)



7区 カマドをもつ竪穴住居(北西から)



8区 炉底部と鉄滓を捨てた土坑(南東から)



8区 素掘り井戸(南東から)



8区 池状遺構(東から)



8区 石組井戸(北西から)

13 大森鐘島遺跡

おおもりかねしまいせき

所在地：福井市大森町字鐘島

調査原因：一級河川志津川河川改修工事

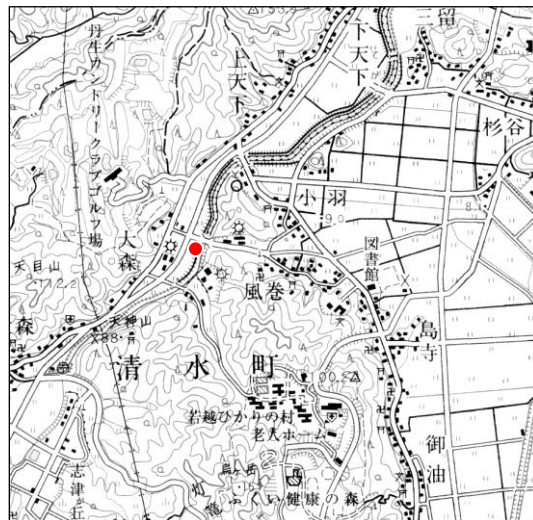
調査期間：令和4年5月～6月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：790 m²

時代：弥生時代後期、古墳時代前期

奈良時代、平安時代前期



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 大森鐘島遺跡は、丹生山地に源をもつ志津川が天目山と天神山の間を流れ出た後、明寺山丘陵に沿うように流れる地点の志津川左岸に位置します。過去には、旧清水町教育委員会や福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにより、志津川の護岸工事に伴うトレンチ調査や排水路部分に限定した工事立会を行い、大型の柱穴が見つかり、須恵器硯や墨書土器、木簡などが出土しています。今回の調査箇所はその西側にあたります。

なお、本遺跡の東側にある明寺山には明寺山廃寺が位置し、旧清水町教育委員会による発掘調査の結果、平安時代前期の寺院跡と確認されています。

主な遺構 発掘調査の結果、調査区の全体に造営された掘立柱建物が7棟、この建物と並走する溝状遺構2条と柵列1条などを検出しました。掘立柱建物は、奈良時代のもの3棟、平安時代のもの4棟で、最も大きな柱穴は約130 cmを測りました。また、同時期以外の遺構として、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての溝状遺構1条と土坑1基を検出しました。

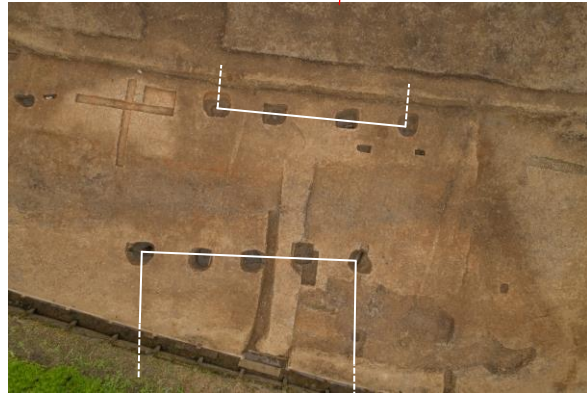
主な遺物 遺物は、弥生土器（後期）、土師器（古墳時代前期と奈良時代～平安時代前期）、須恵器（奈良時代～平安時代前期）、木製品、石製品が出土しました。出土した須恵器からは、「寺」と推測される墨書土器や転用硯など寺院との関連をうかがわせる遺物も確認されました。このほか、緑釉陶器や灰釉陶器も数点ですが確認しています。このように、掘立柱建物群や出土した土器の様子から本遺跡は、大規模な集落ないし寺院関連施設であることが分かりました。（川端 良招）



調査区全景（東から）



掘立柱建物（調査区外へ伸びる）



掘立柱建物（2棟が並列）



柱穴（長軸約 80 cm）と柱根（直径約 30 cm）



柱根（直径約 20 cm）と柱を支える礎板



遺物（須恵器の蓋と甕）出土状況



須恵器（墨書で「寺」？と記載）

なごじょうあと 14 南居城跡

所在地：福井市杉谷町、南居町、冬野町地係

調査原因：緊急調査

調査期間：令和4年8月～10月

調査主体：福井市教育委員会

調査面積：20 m²

時代：中世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 標高 202.14m の通称“城山”^{じょうやま}に築かれた中世の山城跡です。今回の調査は主郭^{しゅかく}にある、東西 10.7m、南北 7.7m、高さ 1.1m のマウンドで実施しました。マウンドでは拳大から人頭大の角礫^{てつとう}が散乱し、鉄刀片が見つかったことを契機に発掘調査を実施しました。

主な遺構 マウンドは地山を削り出し、盛土により構築しています。平面形は長方形で、東西 9.5m、南北 6.5m、裾部からの高さは 1.1m の規模を測ります。角礫は盛土上に不規則に置かれた状態で、頂部を中心に密集していました。斜面ではマウンドが後世に削られ、転石などありましたが、元はマウンド全面が角礫に覆われていたと考えられます。

主な遺物 主な出土遺物として、攪乱層^{かくらん}や流土^{りゅうど}から鉄刀と石製品などが出土しました。鉄刀は直刀^{ちよくとう}の茎^{なかご}から上^{かみ}身の一部で、13 世紀頃のものと考えられます。石製品は、蓋状のもので、復元長は外径約 33cm と推定されます。その他、表採遺物では、宝篋印塔^{ほうきょういんとう}の一部や越前焼かめ片が多数出土しています。

まとめ 南居城跡は中世の文献にも登場する山城で、城山頂上部のマウンドもそれに関連するものと考えられていました。しかし、マウンドが角礫に覆われていること、出土遺物の越前甕片や石製蓋製品^{きょうつづ}は経筒^{けいとう}を納めた外容器^{がいようき}、鉄刀を副葬品^{きょうつづ}と考えたと経塚^{けいづか}である可能性が高いと推測されます。経塚は、麓^{ふきのし}にあったとされる「踏野寺」との関係性が指摘でき、これまで山城とされてきた南居城の新たな側面をうかがい知ることができる結果となりました。

(白崎 一夫)



写真1 調査地全景



写真2 斜面の様子



写真3 盛土の様子



写真4 出土遺物(石製蓋製品)



写真5 出土遺物(鉄刀)

15 福井城跡

所在地：福井市中央1丁目5番街区

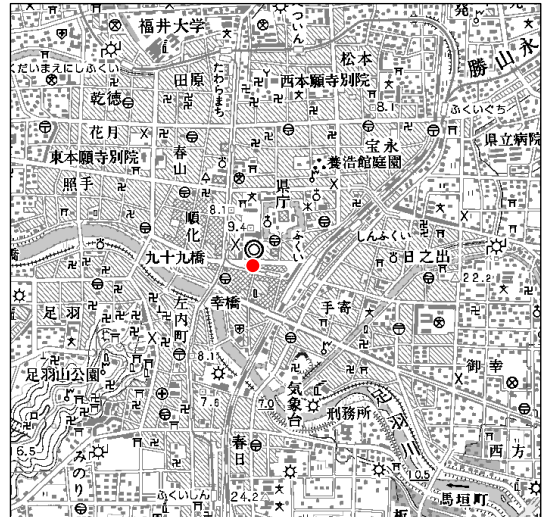
調査原因：市街地再開発事業

調査期間：令和4年12月～令和5年1月

調査主体：福井市教育委員会

調査面積：460 m²

時代：江戸時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 福井城は、徳川家康の次男である結城秀康が越前に入国した慶長6年（1601）から6年の歳月をかけて築いた約2km四方の平城です。

調査は福井駅西側の通称“三角地帯”において行いました。この場所は、福井城絵図と対照すると、百間堀西岸の「南外曲輪」と「南三の丸」とを結ぶ大手門である「下馬門」付近にあたります。

主な遺構 地表下約2.0mで、「下馬門」に通じる土橋を確認しました。土橋は東西に石垣を持ち、幅が18.5mあります。石垣は笏谷石製で、一石の大きさは最大0.8m四方を測り、過去行った福井城跡の調査で見つかったものと比べて4倍ほどの大きさがあります。石垣は東西ともに6段分を確認し、さらに下方に続きます。その積み方は、東側の石垣上部3段と西側上部1段分は、福井城天守台や大手門の「瓦門」と同じ切り石で隙間なく積む「切り込みハギ」と呼ばれる手法が用いられています。また、土橋では、東西の堀をつなぐ笏谷石製の暗渠が見つかりました。

今回の調査では、近代建物の影響により、江戸時代の遺構面は1.0m程失われているものの良好な形で土橋が確認されました。土橋の幅はこれまでの福井城跡の発掘調査で見つかったなかでは最大級です。また、石垣の大きさや積み方などが福井城跡の中でも主要部分でしか見られない手法を用いるなど、「下馬門」が重要な門であったことがうかがえます。今回の調査によって、これまで大きさや詳しい場所が不明であった「下馬門」の位置が特定でき、土橋の構造が明らかとなりました。

(白崎 一夫)



写真1 「下馬門」土橋全景(写真上が南)



写真2 東側石垣



写真3 西側石垣



写真4 暗渠(東から)



「福井藩十二カ月年中行事絵巻」より十一月
福井市立郷土歴史博物館所蔵

なかいせき 16 中遺跡

所在地：敦賀市中

調査原因：事務所建設

調査期間：令和4年4月

調査主体：敦賀市教育委員会 日本海航測(株)

調査面積：957 m²

時代：弥生時代後期～古墳時代初頭



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 中遺跡は敦賀市東部の木ノ芽川扇状地上に位置する遺跡です。これまで数度にわたって調査が行われ、弥生時代後期から平安時代の遺物が見つかったものの、明確な遺構は確認されていません。今回は、事務所建設に伴い本発掘調査を行いました。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の自然河川の痕跡とそこに投棄された多数の土器などが見つかりました。

主な遺構 調査区の西側は後世の河川の浸食によって大きく削平されていましたが、東側では自然河川 (SR01) と性格不明の浅い落ち込み (SX01) の2つの遺構を検出しました。SR01 は北から南に流れる木ノ芽川の旧流路で、弥生時代後期から終末期にかけての土器や石器が出土しました。SX01 も木ノ芽川の流れが形成した浅い窪地に土器が多量に捨てられたとみられる土器溜まり遺構で、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が出土しました。いずれの遺構も高環や器台といった供膳用の器が多くみられることから、付近で川辺の祭祀を行っていた可能性も考えられます。

主な遺物 今回の調査では多数の土器が出土しましたが、その内容を見ると、丹後系の装飾器台や近江系の受口状口縁甕、北陸系の擬凹線を持つ甕など周辺のさまざまな地域の影響を受けています。このような状況は周辺に位置する吉河遺跡 (弥生時代中期～後期) や大町田遺跡 (古墳時代初頭) でも確認されており、交通の要所である敦賀の地域的特徴といえます。

そのほか、SR01 では砥石と磨石が近接して見つかり、セットで所有・使用されていたものの可能性があります。また、包含層からは古墳時代中期ごろの須恵器も見つ

かっています。

まとめ 今回発見した遺構や遺物から、調査区付近には弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて木ノ芽川の旧流路が流れ込んでおり、人々がその周辺で祭祀などの活動をしてきたということが想像されます。これまで多数遺物が出土しながらはっきりとした遺構が見えなかった“謎の”遺跡である中遺跡の様相の一部を垣間見ることができたといえるでしょう。 (奥村 香子)



中遺跡完掘状況

のちせやまじょうあと 17 後瀬山城跡（第9次）

所在地：小浜市小浜男山他

調査原因：史跡整備に伴う確認調査

調査期間：令和4年6月～10月

調査主体：小浜市

調査面積：150 m²

時代：室町～江戸時代



位置図（S=1/50,000）

遺跡について 後瀬山城は、大永2（1522）年若狭守護武田元光^{わかさしゆごたけだもとみつ}により築かれ、後瀬山上に城郭^{じょうかく}を、その麓^{しゅごやかた}に守護館^{しゆごかん}を設けました。当城は若狭武田氏・丹羽氏・浅野氏・木下氏の歴代若狭国主の居城として、慶長6（1601）年の京極高次^{きょうごくたかつく}による小浜城築城により廃されるまで存続しました。後瀬山城跡は平成9年に国史跡の指定を受け、平成28年には守護館跡が追加指定を受けています。守護館跡の整備を中心に実施するにあたり、基本情報を得る目的で令和3・4年度の2カ年事業で調査を実施しています。

主な遺構 東側調査区で門遺構を、北側と西側調査区で堀跡を確認しています。門遺構は東西10.4m×南北8.2m分を確認しており、方形に加工した石材を据えています。東側に踏石^{ふみいし}を配していることから東側が正面であったと考えられます。これらの石材は笏谷石^{しゆくだにいし}と思われます。門遺構は江戸時代から昭和前半頃まで門として存続したと考えています。堀跡は石材を7、8段積んで石垣としており、本来はあと1、2段積んでいたと考えられます。このことから本来の堀の深さは3m程あったと思われます。堀跡には裏込めが認められます。また、東側端で礎石^{そせき}が確認されており、堀の基礎の可能性が考えられます。

主な遺物 陶磁器や瓦、銭貨などが出土しています。その中でも門遺構の下層から瓦質の風炉^{かじつ}と呼ばれる茶の湯の席上^{ふろ}で釜をかけて湯を沸かす道具が出土しています。この瓦質の風炉は、城館や寺院など社会的に身分の高い場所で出土することが多いとされており、若狭守護の権威の高さを表す遺物として重要です。（西島伸彦）



写真1 後瀬山城跡・守護館跡調査区全景



写真2 門遺構



写真3 北側堀跡

いしやまじょうあと 18 石山城跡

所在地：大飯郡おおい町石山地係

調査原因：範囲確認調査

調査期間：令和4年4月～令和5年3月

調査主体：おおい町教育委員会

調査面積：450 m²

時代：中世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 石山城跡は、石山集落背後の標高 190mの山上に展開する山城です。主郭からは^{しゅかく}佐分利川上・中流域一帯を一望でき、県道小浜綾部線と県道坂本高浜線が交差し、この地域を支配するうえで重要な場所に築かれています。本調査は、石山城跡の保存活用と将来的な整備の可能性を探ることを目的とし、令和4年度で4年目の調査となります。今年度は、範囲確認と^{くるわ}二の曲輪を中心に確認調査を行いました。

主な遺構 二の曲輪は、主郭から 50m北側に位置しています。二の曲輪では^{ほったてはしらたても}掘立柱建物と思われる^{ちゅうけつ}柱穴を検出しました。柱穴はコの字状を呈し、概ね 1 間間隔に配置されています。コの字状の中央には直径約 1.4m、深さ約 1mを測る^{どこう}土坑があり、越前焼の甕の土器片が出土したことから、甕を埋め込み水甕として利用していたことが推測され、柱穴及び土坑の配置から水甕の^{おおいや}覆屋の存在も考えられます。柱穴以外に地山に直接据え置いた^{そせき}礎石も検出しましたが、2点のみで、他の礎石は抜き取られたものと思われる。また、主郭より 120m北側に位置する小規模な曲輪の調査を行いました。曲輪は、南北 9m、東西 6mを測り、この曲輪からも地山に直接据え置いた礎石と考えられる石材を検出しました。部分的な調査のため、曲輪全体に礎石があるかどうかは判然としませんが、小規模な曲輪でも建物の存在が推察されます。

主な遺物 主郭からは^{はじしつさら}土師質皿(カワラケ)・越前焼の甕・^{はくじ}白磁碗・^{そめつけ}染付碗などの土器片・^{どうせん}銅銭などが出土しており、概ね 16 世紀中頃から後半に相当すると思われる。

(川嶋 清人)



写真1 主郭 全景



写真2 曲輪先端部 全景



写真3 二の曲輪 全景



写真4 掘立柱建物か



写真5 出土遺物

第38回 福井県発掘調査報告会

日時：令和5年7月8日（土）13：00～16：00

会場：福井県立図書館 多目的ホール

主催：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

プログラム

- ・開会あいさつ
- ・発表1 舟寄遺跡 御嶽貞義（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
- ・発表2 一本田清水ケ上遺跡 野路昌嗣（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
- ・休憩
- ・発表3 長崎遺跡 中島啓太（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）
- ・発表4 福井城跡 白崎一夫（福井市教育委員会）
- ・休憩
- ・発表5 丸岡城跡 堤 徹也（坂井市産業政策部）
- ・質疑応答
- ・閉会あいさつ

第38回 福井県発掘調査報告会資料

— 令和4年度に発掘調査された遺跡 —

令和5年7月5日印刷

令和5年7月8日発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター